

「歴史哲学」にまつわる記憶

伊坂青司

私が一九八四年に神奈川大学に着任した年、人文学会主催の自己紹介を兼ねた講演会で、それまでのヘーゲル哲学研究の一端を紹介する機会があった。その時、ヘーゲルの歴史哲学に言及したことで、講演会に出席されていた岡島先生からご質問があった。先生は確か、歴史学は「哲学」ではなく「科学」でなければならないと主張されたように記憶している。これが、新任教員の私が岡島先生から受けた最初の洗礼である。それ以来、歴史哲学は科学でなければ存在意味はないのか、歴史哲学はそもそも科学になりうるのか、いやむしろ、歴史哲学にも存在意味があるのではないか、といった問いが、私の中でくすぶり続けてきた。

当時は「歴史科学」という名称が一般によく用いられ、歴史学は単なる物語の記述でも、理念に基づいた歴史哲学でもなく、客観的な学問、すなわち主観を交えることのない「科学」でなければならないという意味合いが、そこには含まれていた。学生運動が下火になっていたとはいえ左翼的な言論がまだ活発で、歴史には個々の出来事を貫く法則性があり、歴史科学の課題はそうした法則を認識することにあるといったマルクス主義的な理解が流布していた。もちろん岡島先生の言われた「科学」とは、マルクス主義の影響を引きずって俗

流化した「歴史科学」を指すものではなかったであろう。「歴史科学」という学問は、マルクス主義イデオロギーとは異なった次のような理解を含んでいた。すなわちそれは、「歴史科学」を自然の一般法則を探索する「自然科学」から区別して、歴史上の出来事を一回的で個性的な事象として研究する学問というように理解するものである。

歴史学はマルクス主義理論の退潮のなかで、歴史の「法則性」を大上段に振りかぶる「歴史科学」から、「生活史」や「社会史」といった日常性に定位した個別具体的な事象の歴史研究へとシフトしてきたように思われる。それは、資本主義から社会主義へとという「歴史必然性」の神話が崩れ、世界史を原理的に扱う基軸が失われたことにもよるであろう。そうしたなかで、従来の歴史学に対して、「生きた歴史学」を提唱するアナール学派が注目され、日本でも「社会史」に関する翻訳書や著書が数多く出版されてきたことは、周知の通りである。私がよくお邪魔した岡島先生の研究室の書棚にも、興味を引くその種の本が数多く並んでいたことを記憶している。

*

ところで現代、産業や文化のグローバル化が進行する歴史的状況のなかで、地球的な規模で世界史を振り返えらなければならない課題に私たちは直面している。近年「世界史」の哲学」をテーマにする本が出版されていることもまた、その証左の一つであろう。哲学史上で「世界史」をテーマに哲学的観点から正面きって論じたのは、言うまでもなくヘーゲルである。彼は「世界史の哲学」(Philosophie der Weltgeschichte)と題して、一八二二年から三一年にかけて約一〇年の間、ベルリン大学で講義をしている。それに先行

してカントは、人間の歴史を原罪と墮落から理性によって「より善いものへと次第に発展してゆく」プロセスとして描いた（『人間歴史の憶測的起源』一七八六年）。カントの薫陶を受けたヘルダーは、『人類歴史哲学考』（二七八四～九一年）によって自然史を基礎に地球上の諸民族の歴史を論じた。その手法は、世界諸地域の地理的特性と自然風土から諸民族に固有の文化を考察するものである。ヘーゲルはこのような先行研究を念頭に置きながら、『世界史の哲学』講義を開始した。こうして「世界史の哲学」講義では、アジアからギリシア・ローマを経てゲルマン世界へと至る諸世界の時間軸による配列と、諸世界の地理的特性や自然風土という空間軸による配列とが、重ねて論じられたのである。

ところがこれまで、ヘーゲルの「歴史哲学」といえば、世界史の発展において「アジアでは一人が自由」で、「ギリシア・ローマでは若干の人々が自由」になり、「ゲルマンでは万人が自由」になったという極めて単純化された図式が流布してきた。そのような図式が、自由の未発達なアジアと自由の実現したヨーロッパという紋切り型の対比にも影響を及ぼしてきたことは否定できない。こうした俗流化された「歴史哲学」の図式は、これまで一般に使用されてきたテキスト、すなわちグロクナー編『ヘーゲル全集』第一巻の『歴史哲学講義』（ガンス編集による第一版のカール・ヘーゲルによる改訂版）に基づくものである。この旧版のなかに、世界史を自由の発展史とする前述の図式が描かれている。ちなみに邦訳としてこれまで一般に読まれてきた武市健人訳『改訳・歴史哲学』上・下巻（『ヘーゲル全集・第一〇巻a／b』、岩波書店）もまた、グロクナー版を底本にしたものである。

しかしこのグロクナー版には、一八二二／二三年に行われた最初の「世界史の哲学」講義の内容が、実は

ほとんど反映されてはいなかった。ところが、旧版には収録されなかった聴講生の講義筆記録を基にして、新版のテキストが一九九六年にようやく刊行され、ヘーゲル最初の「世界史の哲学」講義が解説できるようになった。この新版によって、ヘーゲル歴史哲学の俗流化した言説によって覆い隠されてきた原「世界史の哲学」講義の特徴が明らかになりつつある。その内容は、これまで一般に通用してきた従来の旧版テキストとは大きく異なっており、これまで流布されてきたヘーゲル歴史哲学の通説を再検討する必要性が生じている。例えば世界史の発展を自由な人の数の違いで区分けする旧版の図式は、新版には見られない。さらに、新版では世界史の区分に先立って、「世界史の地理学的基礎」として世界が地域性の視点で区分され、それぞれの地理的特徴が論じられている。ヘーゲルの「世界史の哲学」講義がもとと内包していた「地域性」の視点は、グローバリゼーションの進行に対して「地域」の意義が見直されつつある現代、その先見性をもっと評価されてよいであろう。

*

私は神奈川大学に赴任して二八年ほどになるが、最初に岡島先生から受けた洗礼をずっと忘れることができず、またヘーゲルの歴史哲学へと回帰してきたわけである。岡島先生の問いは、私にとってそれほど強烈なものであったであろう。ただ回帰したとはいっても、二八年前の同じ地点に立ち戻ったというわけではない。この間、歴史学の風景も変わってきたし、ヘーゲル歴史哲学の研究状況も進展してきた。二八年前には、ヘーゲル歴史哲学は紋切り型の進歩史観として解釈され、私も一般に流布した通説に乗っかって歴史哲学を論じてきたことも否定できない。しかし今や、ヘーゲル歴史哲学の通説を大きく修正する必要性に迫られてい

る。それは確かに、新たなテキストの出版という研究状況の変化にもよるが、それと同時に、この三〇年近くの間が生じた歴史的状况の変化にもよるであろう。かつての楽観主義的な歴史観はすでに過去のものになり、今や地球全体の危機的状况が私たちの歴史観を大きく変えつつある。私たちは現代という歴史的地点に立って、世界史的視野から歴史を捉える「歴史哲学」を必要としているのではないだろうか。「歴史哲学」の存在意味は、失われたのではなく、むしろますます大きくなりつつあると思われるのである。